



明日、君に逢ふ日。

母が行ってみたいと言ったので、父はその山一帯をまるごと買った。

母がまだ女学校に通っていた頃、ラジオ放送で山に啼く野鳥の声を聞いたのだそうだ。そのことは新聞を騒がせもしたらしい、子供にする思い出話を耳にして家屋の手配までの一切を即断してしまう父に母は困ったような、許すような顔をしていた。

空気が清涼で、内閣や財閥関係者を襲うような輩が訪れようもないところ、病がちな母のためなので道を通して家を建てたくらいで他は整備をしにくい。村ともさほど離れていない場所に温室と厩舎もある赤司邸は驚愕と羨望を以て在の者に迎えられた。本人はいわゆる財界人で、鉦山やらを所有し、東京で会社を動かしている。彼は地主として車を通すようになったことでその貧しい村を拓いたと言われている。

赤司征十郎は、母について東京の麹町から離れた山奥で暮らすことになった。昭和十年のことだ。

駅から軽井沢を抜けて山道を回り、高原を目指す。どこを向いても緑だと思っていた景色の中で目の端に赤いものが映り込んで消えた。征十郎は首を捻ってから正面に戻す。

「いやあずいぶんと春らしくなりました、坊ちゃんはおいくつにおなりで」

「十歳です」

「さいですか…」

運転手は低い声でしんみりと呟く。

「寂しいですねえ、お父様と離ればなれなのは」

「……」

それでもない。

父親は家に帰らないこともしばしばあったし、母でさえ一緒にいる時間は多くはなかった。征十郎が、学校以外で東京で行ける場所は限られていた。浅草公園もそうだったし、上野も展覧会に行くくらい。幼かったのもあるが、そんなものとも思っていたから生まれてから住んでいた東京の家を懐かしんだり恋しがることもない。なので、家庭教師は手間だろうがこちらの方が住みよいように思える。

いま、赤司邸までフォードを動かしているのはかかりつけの医者 の運転手で赤司家の者ではない。でこぼこした道を東京とも変わらぬ安定さで走るのはなかなかの技量と言えるのだが少しばかり口が過ぎる。

「母がいるので寂しくはないです」

父が家に居ないというのには自分が物心つく前からだったのだし、慣れたことなので征十郎にはなんの感情も湧いたことがない。ただ、二年前にこちらへ来て、母が病院に入院したときだけは一睡も出来なかったがあれが心細いというものなのだとは思った。

「それに家の者も、友もいます」

けれどもあの朱色の結界内から彼がやって来た。

十にもならない子供がそれこそ暗闇に埋め尽くされた山道を明かりもなしに歩くのだ、途中に沢があつたはずで、狼か猪なんかもいたはずで、征十郎は土で頬を汚し、腕や足に引つ掻き傷をつくり枯れ葉やらをまとわりつかせた彼を見てぼかんとした。しかも、うちは犬神様なので大丈夫です、と胸を張った。意味するところがさっぱり解らなかつた。

母のような柔く、少し青みのある陶器のような肌が透き通つた肌色というものかと考えていたが彼はそうではなく、色が薄いように思われるのに瑞々しく、緑と太陽の下にいるのがよく似合うような清げな白さだった。空を吸い込んだような目の色やら光に淡く見える頭髮も、公家や華族の姫なんかよりもずっと浮世離れしており、神職の子とはこういうものなのだと感心すらしした。

まあ、夢みたいいなそんな風貌はすぐに現実によつてぶち壊されたのだが、征十郎の友である。

「そりゃよかつた」

思わず顔が綻んだのを鏡に見たのか江戸訛りの運転手は笑った。

「あすこもが増えましたからねえ」

赤司がホテルを建設する予定地があり、そのため資材や技師たちが運び込まれ、村に戻つた家族や若者がいて、村の学校も同級生が何人か集まつている。

「帝都では築材が不足してるそうですが、確保しておられると聞いています。ここいらもこの凶作に浅草でルンペンなんざやるよりもよっぽどです」きつとそうです。

噛みしめるようにそつといわれた言葉を征十郎は聞こえない振りをした。

この年の夏、冷害により作物は不作だった。農家は大凶作から立ち直りきつておらず、東京でも軍と警察がもめるなどのいざこざが聞こえ、不穏な空気が広まつていた。そして海を渡つた中国北京の盧溝橋で日中の軍が衝突するという事件があつた。責任の所在について互いの主張は平行線なまま停戦どころではなくなつてそのまま戦争になり、現在にまで至つている。戦は貧困を生み、富を生む。軍は国に現実的な効果を生む、戦いは益するところであり、忌避するなど景気を下げるようなものだ、軍の猛者は言うだろう。間違いとは言えないのだと征十郎も思う。恐慌にも怯まない、征十郎は父が商人でもあるのを教わるでもなく解つていたから予め資材の調達も出来ていたことを知っている。やがて軍用に払い下げられることもするだろう、軍も国家も外国だつて家にとつ

ては商売相手だ。それが今の己の生活を、赤司の家を支えている。とくに母はこのところ頻繁に医者が必要になってきていた。

「……」

伝えてある時間びつたりに開いてある門扉に見知った影を捕らえた。フォードはこのまま何も言わなければ門内に滑り入り、玄関前に着けられてしまふ、征十郎は厩に寄りたいからと円状の中途半端な位置で車を停めてもらう。車寄せよりも逸れて荷馬車用に別門が門をはずしてある、まだ届くものがあるから閉めない時間だ。轍をくつきりと残してフォードは出ていく、少々の時間は取れるはずだった。

征十郎は急いで門まで取って返し、手持ち無沙汰に草を手にして壁に寄り掛かっている少年に声を掛けた。

「テツヤ」

「征十郎くん」

少年は帯の結び目を弾ませてやって来る。慌てて着替えたのだらう、井桁を散らした袴が小さな身体を包んではいたが襟がぐずっていた。よく崩れないものだと思わず笑みがこぼれてしまふ。

「お帰りなさい」

「待っていたのか」

少年は誰よりも折目正しい。装うでも気取るでもない躰というものを実現した振る舞いはついぞ見たことがない、と初めて会った時は正直驚いた。そのままそれが彼の印象で、他にいくつか足

されてはいつたが、指折り数えて知る今が楽しい。山が大好きで、生まれ育った神社も大事にしている、祖母の手作りのおやつで育てられた甘党、学校で一緒に叱られたので見知ったのだが、自分だけだろうと思っていたことなので更に驚いたの言うまでもない。『おもしろい』と思った。

「草笛、うまく出来ました。君のお陰です」

「帯が回ってるよ。急いで来なくても明日、学校で会えるのに」

「ですが、早く教えなきゃと思います」

着物を引っ張る。少年は至って真面目な口調だった。

「お神楽の稽古もするするいつたんです。だから、平気です」

力強く草を握り締める。征十郎がなしたことで自分にいいことがあったのだから彼に良いことが起こらないはずがないと信じているようだった。

「今日はとくに神様に聞いて貰えるように頑張ったんですよ」

「いつもは力が入らないみたいなの……」

「気分ですから、祝詞のりとだって聞いてないこともあると思うんですよね」

神に奉職するところの宮司の子はさりとて言う。彼は代々山社の預かる家の一人息子だ、学校では細く存在感のないところから『トウスミ』だとか『トンボ』だとか呼ばれていた。トウスミトンボは子どもでも容易く潰れてしまふ、だからきつと間違っではない。教室の隅で本を読んでいるような大人しい性格で、

蒲柳の質だと思われていたが、これが違う、芯が鋼で出来たトンボのようだった。力は強くない、しかし折れない。負けず嫌いで悪いことは悪いと上級生に撲たれようとも意志を曲げない頑固な少年だった。先生相手にだつてそうだ。夜祭りでの姿に征十郎はすっかり目を奪われ、話すようになってからは心も奪われていた。

『おもしろい』は転変する、明日も明後日も待ち遠しい。彼はいま例祭に向けての奉納舞を毎日繰り返して練習しており、縁あつて八尾の男舞を仕込まれてもいるようだが、そちらは気が乗らないようだった。

「征十郎君のお母さんもよくなりませう」

「テツヤが舞うのをきくと見たいって言うと思うよ」

征十郎は篝火に浮いた様子を思い浮かべながら頷く。湯立てという神事は土地ならではで、拝殿前に湯釜をすえる。神々を勧請する神名帳を読み上げ、神々に湯を献じ、衣をかけたたすき舞、女装した男性が舞う羽ざろいの舞、夜が更けると仮面の舞をし、襦ぎをする。少年の舞は幻灯を見ている心地がしたものだ、どうして誰も自分みたいにみとれないのか不思議なくらいだった。興奮してすぐさま母に話した、すてきね、次は必ず一緒に見ましようねと約束をした。

「舞いませんけど」

相手の笑みが張りついたまま固まっている。つられて征十郎もぴたりと動きが止まった。

「……」

「僕は笙を鳴らす方で、その、お能の方なら、少し……」

お話しませんでしたけど、と少年はぎこちなく自身の手を擦り合わせる。

「祓えと同じように祝詞なんか奉りますし、毎年のお祭りはしますけど、あれは八幡様ゆかりなので、いつもではないのです。舞うのは本祭りのときだけで。征十郎くんが気に入ってくれたのとても嬉しいのですが」

「……」

「あ、赤ちゃん」いたいたー。

背後で鈍く声がする。紫原敦だ、赤司のお抱えコックの子息だが、同い年で丁度良いからという理由で征十郎の話し相手兼、目付役を押しつけられている。どうしようと気の良い少年は困ったように征十郎を見詰めた。

S

兄弟は二人と二匹だった。

正しくは、ひとが二人と犬神が二体だ。美しく舞う巫女に惚れた山犬が拐かしたとそれだけの話といえどもそれまでなのだが、問題は山犬が神界の眷属であったということだ。

巫女は犬神憑きであり、子を産めばみるみる人らしい気を失っ

ていった。それは、住まう世と異なる世を彷徨うに等しく、人の目からふつと消えそうになることだ。三の年もなかつた、巫女はすっかり弱まってしまった。生まれた頃より歩くことの出来た一番の兄が母の手を引き人に助けを求めて里に降りたところへ天狗に連れ去られ、第二匹は途方に暮れた。二匹は化けることがまだ出来なかつた。母は村人に見付けられ、人の元へ帰されたが、残された末の弟は人のままでも成長も一番遅く、そして弱かつた。

彼らが出来たことは細る母の氣を探し当て、末の弟をその社に置くことだけだつた。

山に囲まれた地であつた話である。

兄弟は上から緑間、黄瀬、青峰、黒子、と名がある。

山の名であり、社の名でもあり、つまりは親である犬神が名告つたものだ、いやもう氣に入らなくても受け入れるしかない。二匹はこの年、人の氣に馴染むことが出来、ようやくと化けるのがさまになった。ついでに言えば、末の弟が心配で見たくてその一心で得たものだつたりする。

黄瀬と青峰は母が持ち直したと思われる頃、弟を覗きに行つたことがある。二匹は毛並みの美しい犬神ではあつたけれど人の目には映らず、ごく僅かの人に認められる神力しかなかつたが、母は兄弟を見るとすぐに手招きをした。腹掛けをした末の弟が健や

かに眠つていた、弟を挟んで兄弟は久々に微睡んだ。母が儂くなり、長じるとつれ末の弟は人らしくなり、兄を見ることは叶わなくなつていったがそんなことはどうでもよかつた、人の生きる時間には彼らとくらべて切ないほど短い。

「何スカね、緑間っちは人がいいそうっすよ」

「…ふん」

青峰は供えられていた団子を食みながら返事ともつかない返事をする。

「天狗はそんな嫌なかつて高尾っちが」

どこからどう見ても人の子である姿を水たまりに映しながら黄瀬は停車場に向かう青峰の後をついて歩く。大人の足で半日かける道に工事のためと一日二本の車が走つていた。乗り合いもあるが、朝はこれだ。都の方は細長い市電というのがあつてひっきりなしに行き来する、田舎とはいえ自動車など驚くほどでもない。いかにも近くの村の子という風にして二人はバスなる車に乗り、弟の黒子が通う学校へと運ばれる。

「連れてかれたのが嫌だつたんだろ」

緑間は兄弟の誰よりはつきりしていたので「人」が天分であると思いたいのだろう、どつこい眷属であることは避けられようもない、風も操れる天狗なので末の弟のようにはなれないことを二人は知つていた。

「黒子っちは、やっぱ人なんスカね」

ぼつりと黄瀬が呟く。青峰は串を投げ遣りながらぶつきら棒に
応えた。

「テツだろ？ 人なんだから」

「人でも黒子つちスよ」

彼は『テツヤ』と名を付けられ、三峯の摂社である社の子となつ
ている。宮司は山の名を頂いた姓氏で代々続いていた。弟は無意
識だろうが気を隠して奉納神事を舞い、神楽を奏でる。神はこれ
に耳を傾けるようになってい、見る者が見ればそれこそ神々し
く思えるだろう、だがどうしてか地味で、そこが救いだつたりも
する。

「十二つてのはひと回りつてんだろ」ナリが決まるのかもな。

と、青峰は答えては串を捨てるなど隣の年寄りに拳骨を食らう。
バスとは言うが、大八車に幌の屋根がついたようなものだ、前方
のエンジンが引つ張っているというだけなのででかい荷馬車と乗
り心地は変わらない。がたつきながら山道を進むのだ。学校へ通
う子どもがいて、野菜を籠に積んだ夫婦がいて、行商風の男と話
している。

「…だから旅館でも旅館でもなく、ホテル！」

「おれア倉庫と聞いたぜ」

ぼんぼん声高に飛び交う言葉は詛りがさほど交わらない。乗客
は殆どが職を求めて渡り歩いている者ばかりなのだ。

「中止にならなきやいいけどな」

「大将は屑鉄もやつてるそうじゃねエか、くたばるもんか」

黄瀬は肩を竦める。どうにも月を過ぎること、小さくだが人の
生活を絞っていくものがあるように思えてならない。ふと見ると
そこだけ物がなかったり、ぐんと人が減っていたり、長引いてい
る戦争のせいかな歪さは知れない不安感を抱かせていた。隅の方で
無言のまま蹲るように丸くなっている男が気にもなる、幾日も水
をぐぐらせていないような服を着ており、うつろな目をしている。
男からは血と脂の臭いがした。

「ね、青峰つち」

顔が俯く。人でしかなかった弟を結局は手放すことしかできな
かった思いが深く残って消えないでいる。自分たちは守れなかつ
た、人に預ければ育つと思っていたが、その人に命を奪われるこ
とになつたら。

「あ？」

「変なことにならないつスよね？ 兵とか」

「何言つてんだお前」

「『じゅうごのそなえ』つてラジオでも言つて…」

面倒そうに黄瀬を見る青峰はぎくりとしたように動きを止める。

「…お？」

黄瀬達に背を向け、陽気に喋る男二人の前をすり抜けるように
一台のフォードが駆け抜けていった。接触しないぎりぎりで追
越して行き、バスの運転手の方が泡食つたらしく、過ぎた後でブ